

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第182号

イザヤ 65:1

平成22年11月26日

神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。それで、神が地の上に風を吹き過ぎさせると、水は引き始めた。また、大いなる水の源と天の水門が閉ざされ、天からの大雨が、とどめられた。そして、水はしだいに地から引いていった。水は百五十日の終わりに減り始め、箱舟は、第七の月の十七日に、アララテの山の上にとどまった。水は第十の月まで、ますます減り続け、第十の月の一日に山々の頂が現れた。四十日の終わりになって、ノアは、自分の造った箱舟の窓を開き、鳥を放った……ノアの生涯の第六百一年の第一の月の一日になって、水は地上からかわき始めた。ノアが、箱舟のおおいを取り去って、ながめると、見よ、地の面は、かわいていた。第二の月の二十七日、地はかわききった……そこで、ノアは、息子たちや彼の妻や、息子たちの妻といっしょに外に出た。すべての獣、すべてのはうもの、すべての鳥、すべての地の土を動くものは、おのおのその種類にしたがって、箱舟から出て来た。ノアは、主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。主は、そのなだめのかおりをかがれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地を呪うことは住まい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい……」 創世記8章

世界中至る所で五百以上にのぼる洪水神話が伝承されていますが、そのほとんどが、神に選ばれた民八人、大きな船、動物も救われたこと、救われた者たちは山の頂に置かれたこと、鳥が放たれたこと、大洪水の原因が人の悪のゆえであったことに言及している点で、共通しています。1845年英国の東洋研究家たちが古代アッシリヤの首都ニネベを発掘作業中に、アシュルバニパル大王の図書室の大規模な廃墟の中から、アッシリヤ版の洪水物語が発見されました。見つかった書板（くさび型文字が彫りこまれた二万枚の粘土板と破片）は、当時二十一歳の大英博物館職員のジョージ・スミスによって、分類、組み合わせ作業が行われ、1872年、ついに努力が報われて『ギルガメシュ叙事詩』を再構成という快挙に導かれたのでした。聖書の洪水物語に通じていたスミスが書板の破片の内容と聖書の叙述の類似性に気付き、洞察と方向性が与えられたことによって、大変な労力、時間、根気の要求される至難な作業が成功に結びついたのです。当初は、バビロン捕囚にあったイスラエルの民を通して洪水物語がバビロンはじめ近東一帯から全世界に広められたとみなされていましたが、その後の研究で、ノアの三人の息子たちの子孫が世界中に移住したことによって伝えられたことが有力視されるようになりました。

医科学、工学、考古学の目覚ましい発達によって、昨今、聖書に記されていることがいかに正確であるかが立証され、また、聖書の預言を信じた者たちが記述通りに探求した多くの成果が発表されています。このように、これまで人間の側に解明能力がなかったために、実話ではなく神話であるとみなされてきた多くのことに歴史的裏付けがなされてきているのは、聖書が「神の言葉」であるからです。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである」(黙示録 22:13)、「遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごととは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』」(イザヤ書 46:9-10)と言明された唯一真の神ヤーウェが語られた真理だからです。今世紀は、キリストが「天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」(マタイ 5:18)と言われたお言葉通りに、だれの目にも全聖書の信憑性が明らかになる特権の時代と言えるでしょう。

ノアの洪水はノアが六百歳のとき起り、大地の「巨大な大いなる水の源」からと「天の水門」が開かれたことによる四十日四十夜の雨とにより、水面に漂う箱舟(長さ135m、幅22.5m、高さ13.5m)を除いて、すべてのものが視界から消え失せる大洪水となったのでした。地をおおった水は百五十日間増え続けた後、水が減り始め、「第七の月(宗教暦では「第一の月」)の十七日に、アララテの山の上にとどま(りました)」その後、天地創造の再現を思わせるようなプロセスを経て、回りの山々の頂が現れ始め、大地が現れ、草が茂り、木々が芽吹き、「箱舟から出なさい」との神の御命令によって新天地に人と動物が放たれることになったのは、一年余を経た「第二の月の二十七日」でした。新天地に降り立つやノアは神を覚え、神の御旨に従っていけにえをささげ、このようにして人類の再出発が神との正しい関係で始まりました。しかし洪水後の神の心の中の言葉「人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」に表されているように、神は洪水によって人が完全に聖められたと



暗闇から光を切望する時節がまた巡ってきました。

世の光、イエス・キリストは、人類の救いのため手を差し伸べておられます。

主、イエスを受け入れ、信仰、希望、愛が、

皆様の心に灯される時節となりますようお祈りいたします。

は言われませんでした。サタンの罪が入った肉の身体で生きるかぎり人は罪の奴隷で、滅びに向かっているのです。しかし、神の憐れみだけがこのような惨めな人を滅びから救うことができると明言されたのでした。

過去、この聖書のくだりから、トルコの「アララテ山」近辺で、ノアの箱舟探索がさかんに行われてきました。多くの主張が偽りと判明された中で、今日、考古学研究者ロン・ワイヤットの発見をインターネット上で船型地形の現地写真や人工衛星写真を通して見ることはできますが、果たしてノアの箱舟跡が発見されたのでしょうか。「アララテ山」は「**シヌアル (バビロン) の地**」の北西部にあり、洪水後四千年後にこの名がつけられたのでした。十一世紀にアルメニア人が「ノアの山」と呼び始め、十三世紀にマルコ・ポーロがトルコを通過して中国に向かったとき、「これはノアの山で、ノアの箱舟が山の上にある」とだれかが言ったのを聞き、「それならこの山はアララテの山に違いない」と、自著の地図に「アララテの山」と書き込んだことから、それ以降そのように呼ばれるようになったのでした。まさにシナイ半島にある「シナイ山」と同じように、憶測から名がつけられた例ですが、聖書の記述を注意深くたどれば、いずれも聖書が語っている場所でないことは明らかです。「シナイ山」の場合は、二十世紀末から今世紀にかけての最新技術工学を駆使した調査によってアラビア半島にある「ヤベル・エル・ラウズ山」が間違いなく聖書の語るシナイ山であることが実証されてきています（『一人で学べる出エジプト記』に写真、図解掲載）が、「アララテ山」に関しても2006年の画期的な発見により、イランにある「サルマン (ソロモン) 山」が聖書の語る「**アララテの山**」であることが明らかになりつつあります。

「サルマン山」はシヌアルの地の東の、二千年以上にわたって「アララテ」と呼ばれてきた山岳地帯の山々の一つで、近東の中部一帯でヘブル名がつけられている唯一の山です。600BCEから900CEの間の異なった時期に作成されたこの辺りの四つの地図のいずれにも、山の一つにノアの箱舟があることが記されており、それがこの「サルマン山」です。創世記11:2の洪水後の人類の移動についての記述「**そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した**」を文字通り捉えれば、ノアの息子たちの子孫はバビロンの東から移動したことになり、また、冒頭に引用した創世記8章の記述では「**アララテの山**」は山々に囲まれているはずであることから、聖書の語る「箱舟がとどまった山」はトルコの「アララテ山」ではあり得ないこととなります。箱舟探索のため多くがトルコに関心を向けている中、イランの「アララテ山岳地帯」に目を向け、現地検証をしたごく少数の者たちがいました。3900mの山を道案内してくれた七十五歳になるサルマン山の所有者によれば、三十五年前にドイツ人グループが訪れて以来、白人はだれも訪れたことがないこと、山は長く雪と氷に覆われていたため五十年以上ぶりに「ノアの箱舟」が現れたこと、五十年前は現在より600m以上高い4500mの地点にあったが、2000年に一帯を襲った、六万四千人もの生命を奪った大地震で、箱舟は地滑りし、山肌の大岩にぶつかって止まり、現在の位置に折り重なるようにして石化した木片が積み上がったということでした。山のように積み上がった遺物の中から断片を持ちかえたアーチ・ボンネマは、数種のサンプルをそれぞれ米国の五つの研究室とケンブリッジ大学の研究室に送り、DNA鑑定などの検証、特定を依頼したのでした。すべての研究室の結果は同じで、「私たちは聖書を信じないが」とか、「私たちはクリスチャンではないが」とか、「名前は出さないでほしいが」という前置きで、どの研究室も異口同音に不思議なサンプルの特定を「考えられるのはノアの箱舟のような現象としかいえない」と結論づけたのです。

ボンネマが持ち帰ったサンプルは、どれもユニークな物ばかりで、海水に生きる生物が中に深く埋め込まれた状態で石化した木や、樹脂がたっぷりしみ込んだ石化した木材から、層になった岩のように見える黒色、石化した遺物などでした。木材に樹脂がしみこませてある唯一の理由は、船造りのためで、木材に付着していたイソギンチャクや貝類など数種の化石化した生物が海に生息するものであることから、これらの断片は海水に数カ月間浸かっていた船のものであることは明らかでした。船体の外側にしっかり付着し、航行の妨害を起こすフジツボも発見されました。しかしこれらの海の生物を含んだ船の部分と思われる石化した木片は、テヘランの北西の3900mの高山で見つかったのです。五ヶ月余も水の面を漂泊し、辺りでは一番高い「**アララテの山**」の上に留まったノアの箱舟以外に、現地に積み上げられている膨大な量の木片の出所を特定することはできませんが、さらに決定的な証拠が、黒く石化した岩のような断片のDNA鑑定で分かったのです。岩と思われた層を成した堆積物が動物の糞尿が石化したものであると確定されたことにより、この船が世界中の動物、鳥類、昆虫類を運んでいたということが裏づけられたのです。インドの密林地帯に棲息するトラの毛、アフリカだけに棲息するライオンの毛、南アメリカに生息するチョウなど各地の生き物の糞であることが分かったのです。また、馬のDNA鑑定から、その馬は世界で最古の馬であることが分かったのですが、まさに北部イランこそがその発祥地であるという点で、船の発見場所と一致したのでした。さらに興味深いことに、堆積物の中に発見されたぶどうのDNA鑑定で、それが世界で最古のぶどうであることが分かったのです。聖書は「**さて、ノアは、ぶどう畑を作り始めた農夫であった**」と、ノアが新天地に降り立ってまずぶどうの種を蒔き、農作業を始めたことを明らかにしています。イランにボンネマを絶妙なタイミングで探索に送られたのはまさに神ご自身で、神からの靈感に導かれるままボンネマは、ほぼ四千三百六十年前の出来事を裏づけるサンプルを持ち帰ることができたのです。